

平成二十七年 度 入 学 試 験 国 語

京 華 女 子 中 学 校

□ 一の漢字に関する問いに答えなさい。

※答えは解答用紙にはっきりと書きなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナをそれぞれ正確な漢字に直しなさい。

- ① 学級委員をツトめる。 ② お金のクメンをする。 ③ 式典にレツセキする。
 ④ 健康ホケンに加入する。 ⑤ 弁当がタリない。 ⑥ 大会のシユクシヨウカイ。

問二 ①～⑥の——線部の漢字の読みをそれぞれひらがなで答えなさい。

- ① 給水所を設ける。 ② 停留所でバスを待つ。 ③ 簡潔な文章を書く。
 ④ 原油を貯蔵する。 ⑤ 厳密に評価する。 ⑥ 網物を着る。

□ 二 次の文章を読んで後の問題に答えなさい。

小出しに与えられた断片的知識を、小刻みに習得する。学習の方法はどうしても分析的^{ぶんせき}にならざるを得ない。問題は、学習者の頭の中でいつまでもそのままにバラバラな知識としてとどまりがちなことであろう。理解するには分析して小さくし、すこしずつ新しいものを与えるほかはない。しかし、いったん習得した知識はバラバラなものではなくて、まとまりのあるものになりたい。この二つの立場を調和させるにはどうしたらよいのか。それに成功したとき、「知識は力なり」（ペーコン）と言うことのできる知識になる。いまの学校教育は残念ながらそうはなっていないで、切れ切れの知識がいたずらに集積している。もの知り^{ものしり}でしかないものを育てることが多い。

*

バラバラになつて頭へ入ってくる知識を、まとまりのあるより大きな単位に統合するにはどうしたらよいか。こういうまとめを重ねて行つて、ついには体系のようなものにするには、どういう方法をとつたらよいのか。

理屈^{りくつ}はともかく、子供は、ある程度、無自覚に部分の統合ということを行っている。Aのことを思い出すと自然にBをも思い出すというような連想の法則によるものもある。あるいはAが、A、A、Aなど同類のものとひとまとめになつて記憶^{きおく}されていることもある。これらのまとめは個人の偶然^{くうぜん}によることが多いから、人によつてかなり違つた統合をしている。ここで、学習における「編集」理論の可能性が登場する。学習する知識のひとつひとつが「編集」を受けるべき素材である。言いかえると、雑誌の原稿^{げんこう}に相当する。雑誌の編集と違うのは、雑誌なら必要なだけの原稿を注文して書いてもらうのだから、たいていの場合、集まつた原稿は全部使う。ところが、学習における「編集」は学習者の要求にもとづいて提供された素材、知識だけが教授されるのではない。むしろ、欲していない原稿がどんどん投稿されて集まつてきて、混乱している編集部のようなのが子供の頭の中である。ひとつひとつの知識相互^{さうご}の関係もはつきりしていない。要約や整理をするにも、何を基準にしたらよいのかわからないのである。

そこで、丸暗記^{まるあんき}が行なわれる。へたに精選、整理をしようものなら、大事なことを捨ててしまうおそれがある。わけはわからないけれども、とにかく全部覚えておけば安全だという考えである。これがいちばん手がかからなくて簡単だということにもなる。しかし、おもしろいことに、全部丸暗記したつもりでいても、しばらくすると、自然に、多くのことを忘れて行く。覚えていたのはほんの一部でしかない。残っているのが、無意識の編集によつて選ばれた部分で、それがその子供のつくつた知的「雑誌」である。知識は編集によつてのみ、われわれの頭に定着するらしい。たとえ編集を放棄^{ほうき}した丸暗記の学習においても、なお、自然のうちに、知らず知らずの編集は加わっている。

【A】 それにあれこれ衣裳^{いしやう}を着せる。服があつても着せるマネキンがなければ、洋服らしく見えない。

【B】 これからの知識論は当然ここに着眼^{しやくげん}しなくてはならない。まとまりをつくるのには、母型^{ぼがた}がなくては不都合であろう。その母体になるのが理解のモデルである。

【C】 人間の頭に入っているモデルは、マネキンのようにきまり切つた型をしているのではない。理解力のすぐれた子供は、このモデルのたくさん用意された頭をもっていることになる。

【D】 モデルとは、たとえば言えば、洋装店に立っているマネキン人形のようなもの。

【E】 そういう偶然、自然の編集に委ねておかないで、はつきりした統合を考えたらどうなるか。

モデルがいくつも出来ていると、新しく入ってきた新知識は、適当にどれかのモデルを選んで、それに合わせて、これまでの既知の知識と関係づけられて理解される。モデルがないと、空中分解してしまう。

幼い子供でも、かならず何がしかのモデルに相当するものはできているはずである。モデルがなければ、ものはわからない。記憶してられないからである。だれでも三歳くらいまでの記憶がまったく欠けているのは、その年齢まではモデルができていないから、ザルに水を注ぐようなもので、頭に残らない。モデルができるにつれて、経験したことが記憶されるようになる。過去のことを記憶しているというのは、モデルが存在する証拠だ。

このモデルはどうして身につけるのか。学校は断片的知識の供給に忙しくて、モデルづくりにまではとても手がまわらない。おもしろいのはオトギバナシが有力なモデル形成の役割を果たしていることだ。オトギバナシをくりかえしくりかえし聞いている子供は、知らず知らずのうちに、物語性のモデルをいくつか仕込むことになる。ほかのことはさっぱりわからないが、ゴシップや通俗小説ならおもしろく読むという大人が世の中に多いのは、ごく小さいときに、オトギバナシでストーリーのモデルだけはしっかり身につけたおかげである。現代のマスコミも、この幼児期のモデルのおかげで繁栄していることになる。

1、人間の知的活動には、物語のモデルだけでは充分でない。2、オトギバナシ程度にいいいに教えられる原型がほかにないので、有効にはたらくモデルがすくない。3、算数、数学は、論理とか合理のモデルを提供してくれる重要な学科であるが、学科が知識化、技能化していて、モデル作成ということはありません。4、人間関係のストーリーには興味を示すのに、事象の関係を考える抽象象はおもしろくない。難しいものときめてしまうことが多い。各教科は、知識を教えると同時に、その教科でなくては与えることのできないモデルを子供の心に植えつけるのだ、ということをもっとしっかり考えるべきであろう。それらのモデルは、当該学科の知識整理にとって、きわめて重要であるばかりでなく、一般的な理解作用の母型ともなるもので、教育の究極の目標もそこにあるとしてよい。

モデルがあるからといって、それですぐ知識の統合ができるわけでもない。モデルに合わせて、新入の知識は適当に取捨選択、変形、加工などを受ける。5、モデルによる編集がなされる。したがって、同じことを学習しても、モデルが違えば、理解もかならず違ってくるし、さらに、編集は当然、めいめいで違うから、その結果はさらに大きな異同を見せるだろう。理解はきわめて個性的にならざるを得ない。

(外山滋比古『ライフワークの思想』(ちくま文庫)による)

問一 【A】〜【E】は順序が乱れています。論理的に正しい順序にならばかえて、記号で答えなさい。ただし、【D】は三番目にくるものとします。

問二

1 5 入る最も適切な語句を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア たとえば イ つまり ウ もちろん エ したがって オ ところが

問三

線部①「雑誌の編集と違う」とありますが、雑誌の原稿の編集と学習する知識の編集はどういう点が違いますか。「雑誌では、学習では」という書き方で、四十五字以内で記しなさい。ただし、句読点や記号も一字と数えます。

問四

線部②「丸暗記が行なわれる」理由を文中から二つ、それぞれ十五字でぬき出しなさい。ただし、句読点や記号も一字と数えます。

問五

線部③「現代のマスコミも、この幼児期のモデルのおかげで繁栄している」とはどういうことですか。次の中から最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア オトギバナシで物語性のモデルを身につけたため、大人になってゴシップや通俗小説がおもしろく読めるということ。
イ 幼児期にゴシップや通俗小説を理解する訓練をしたために、大人になっても同じようなものを好んで読むということ。
ウ 幼児期に大人たちがゴシップや通俗小説を読んでいるのを見ていたため、大人になるとそのまねをするということ。
エ オトギバナシをくりかえし聞いている子供は、知らず知らずのうちに現代のマスコミにあやつられているということ。
オ 学校はモデルづくりに手がまわらないため、人は普通ゴシップや通俗小説でモデルを仕込むことになるということ。

問六 ——— 線部④「理解はきわめて個性的にならざるを得ない」のはなぜですか。その理由として最適なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 学校で理解に必要な記憶のモデルが、教えられていないから。
 イ 新知識には自然のうちに、異なる編集が加わっているから。
 ウ 理解のモデルとなるオトギバナシが、人によって違うから。
 エ 教育の究極の目標が、個性的な理解をすることにあるから。
 オ 知識の統合のためのモデルが、人によって違っていているから。
 カ モデルがあるからといって、すぐ知識の統合はできないから。

三 次の文章を読んで後の問題に答えなさい。

ときどきお目にかかる企画にこういうのがあります。^①絶海の孤島に流されるとして、一冊だけ書物を持っていくことを許されるとすれば、何を選びますか。私にはこの問いには答えられないように思いますが、ここで言いたいのは、この質問が立てられる、ということ自体にあります。つまり、人間は絶海の孤島で、他の人間から完全に隔絶された状態に置かれたとしても、本を読むことはできる、ということなのです。

書物のなかで出会える人間たち、そこに描かれている事件や、考え方や、情景、一言で言ってしまうえば「世界」ということになるのでしょうか。他の人間から隔てられた孤独のなかにあつて、あるいは孤島という極めて限られた環境のなかにあつて、私たちは、書物さえあれば、「世界」と出会うことができます。

確かに、読んだ書物について、お互いにその内容を巡っての感慨や感動を、仲間と話し合ったり、伝え合ったりすることは楽しいでしょう。それも読書の大切な目的の一つかもしれません。ちょうど、一時期の小学生たちが、学校で仲間との共通の話題を失わないように特定のテレビジョンの番組を見ていたのと同じように、仲間との共通の話題を持ちたいという目的で、書物を読むこともあるでしょう。

② すぐそこではありません。恥ずかしさをおして書いてしまえば、中学生から大学初年のころには、自分はこんな本を読んでいるのだと、仲間に見せびらかしたいという、ただそれだけの理由で、私は幾つかの書物を読んだことを告白します。仲間の目を意識しなければ、果たして読み通すことができたか、そもそも読む決心をしたか、それさえ怪しい、というような事態でありました。仲間だけではなく、随分難しい本を読んでいるな、判るのかい、と大人から言われることを、多少とも期待し、そう言われたときには多少とも誇らしく思ったことも、恥をしのんで付け加えておきましょう。

ですから、書物を読む、という行為が、完全に孤独のなかでだけ行われるものである、と決め付けているわけではありません。ちなみに付け加えれば、今から振り返れば、ただただ恥ずかしい限りの、青年の客気^{かつき}とでも言うべき、そうした動機に基づいて本と取り組んだのは、確かに鼻持ちならないことではありますが、しかし、全く否定的に考えないでもよいのでは、というかなん言いつても私のなかにあります。

世の人生訓などでは、背伸びをする、ということは、避けるべきことであると教えられます。身の丈に合った生き方をしなさい、という提言の裏には、自分の力量以上に背伸びをするな、という戒めがこめられています。しかし、私は必ずしもそうは思いません。自分の力量をこんなものと、最初から測って判ったように思って、その範囲のなかで生き、その範囲のなかで行動したのでは、向上も進歩も望めないでしょう。現在の力量からはみだしたものに挑戦する、つまりは背伸びをすることこそ、人間の新しい可能性を拓いてくれるものです。そして背伸びをする動機として、仲間から認めて貰いたい、という願いは、大事なものの一つだと言いたいです。

旧制の高校生たちが、判っても判らなくても、難しい原書を抱えて、闊歩^{かつぽ}していたという話も、単なるご愛嬌^{あいせう}ではなくて、そこから可能性への拓きが生まれることがあるという点で、認めてあげてもよいように思います。

しかし、それでもなお、私は本を読むという行為の本質は、孤独のなかにあると考えています。人間が実際に体験できる世界は、実際の世界の本当にわずかな一部にしか過ぎません。しかも、それを体験によって知っていくときに、私たちは、多くの喜びを受け取ることも事実ですが、もう一方では、多くの苦しみや犠牲を代償に払わなければなりません。

書物は、そうして得られた自分の世界に対して、いとも容易くそれとは別の「世界」を私たちに見せてくれます。現在、コンピ

ユータを媒介^{ばいかい}にして体験する世界のことを「ヴァーチャル・リアリティ」（仮想現実）などと言う習慣がありますが、「仮想的現実」というのなら、書物の方がはるかに先輩^{せんぱい}で、はるかに豊富な「仮想的な世界」を私たちに伝え、体験させてくれます。コンピュータに現れる「仮想現実」は視覚的に与えられます。しかし書物が描き出す「仮想現実」は、文字を仲立ちとするだけに、人間の想像力をはるかに豊かに動員するものとなります。

映像やイラストレーションの方が、判りやすい、と言う人もいるでしょう。しかし、写真^⑤として見せられた美人は、それだけの印象しか与えませんが、言葉で表現された美しい人は、それを読む一人一人が、想像を逞しく^{たくま}して、どのようにでも自分のなかに描いてみることで豊かな自由度を持っています。

書物で読んだことのある小説が映画化されることがあります。文字から想像していた主人公のイメージと、映像化されたそれとが、見事に一致^{いっし}していることもあれば、およそかけ離れているということもあるでしょう。言いかえれば、文字で描かれた世界というのは、映像の世界のように、一つの可能性だけが実現してしまっているのとは違って、百人の読者がいたら、百人の受け取り方ができるような、文字通り「可能的」な世界であるのです。

（岩波書店編集部編『読書を楽しもう』（岩波ジュニア新書）所収、村上陽一郎著「困った注文」による）

問一 ——— 線部①「絶海の孤島」・③「鼻持ちならない」・④「身の丈に合った」の文中での意味として最適なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|------------|---|-------------------------------|--------------|-------------|
| ①「絶海の孤島」 | Ⅱ | ア けわしい崖 ^{がけ} にかこまれた島 | イ だれも住んでいない島 | ウ 美しい海に面した島 |
| | エ | 他の陸地から遠く離れた島 | オ 荒れた海にうかぶ島 | |
| ③「鼻持ちならない」 | Ⅱ | ア 自慢できない | イ 行動がいやみな | ウ 長続きしない |
| | エ | だれでも経験がある | オ においが強い | |
| ④「身の丈に合った」 | Ⅱ | ア 自分の趣味に合った | イ 身長がちょうどいい | ウ 自分の目的に適した |
| | エ | 自分の力量にふさわしい | オ 背伸びできる範囲の | |

問二 ——— 線部②「それ」が指す内容を文中から二十八字でぬき出しなさい。ただし、句読点や記号も一字と数えます。

問三 ——— 線部⑤「写真として見せられた美人は、それだけの印象しか与えません」という理由はなぜですか。「くから」に続くように文中から十九字でぬき出しなさい。ただし、句読点や記号も一字と数えます。

問四 次の中から本文の内容にあうものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 絶海の孤島に一冊だけ持っていく本は何か、という質問には答えがない。
- イ 書物を読むという行為は、完全に孤独のなかでだけ行われるものである。
- ウ 判っても判らなくても難しい原書を持ち歩くようなことは、認めてもいい。
- エ 自分の現在の力量からはみだしたものに挑戦する、ということはやめた方がいい。
- オ 写真として見せられた美人より、言葉で表現された人の方がずっと美しい。

